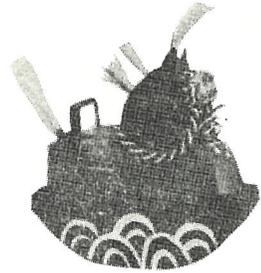


幻の名馬

いけずき・するすみ



竹田 聴 洲

河童と馬の力競べ

河童という動物が村里の川淵に住むことは昔から広く各地で知られていた。その生熊は動物学の全く関知しないところであるが、好んで馬を水中に引き込もうとする著しい習性をもっている。永仁五年といえは一三世紀の末、かの第二次蒙古襲来の直後であるが、すでにそのころ鎌倉のある仏師は、駿馬の手綱を引張って懸命に力闘する河童らしい猿姿を戯画に描いているから、この習性が知られていたのは決して新しいことではない（近藤喜博「永仁年

間の河童騎引戯画」。しかり馬の力の方が強い民間伝承一四卷二号）。と、逆に河童が陸に引きずり上げられることもないではなく、その時の悄然たる姿は文字通り「河童が陸に上ったような」という譬えを地でゆくものであった。

小鳥瀬川の姥子淵の辺に新家の家と云う家あり。ある日淵へ馬を冷しにゆき、馬曳の子は外へ遊びにゆきし間に、河童出でて其馬を引込まんとし、却りて馬に引きずられて既の前に来り、馬槽に覆われてありき。家の者馬槽の伏せてあるを怪しみて少しあけてみれば河童の手出でたり。村中の者集

りて殺さんか許さんかと評議せしが、結局今後は村中の馬に悪戯をせぬと云う堅き約束をさせて之を放したり。其河童今は村を去りて相沢の滝の淵に住めりと云う（柳田國男「野物」）。とは岩手県遠野郷の場合であるが、このような単なる口約束ではなく、この際証文を入れ、あるいは秘薬の製法を伝授させられるとか川魚を毎日献上することを代償に漸く釈放された河童も江戸時代には各地に珍しくなかつた。

「河童」（カッパ）という字訓は今では標準語とさえなっているが、勿論漢字の普及以前から到るところの沼・川に住み、一方カッパ以外にガタロ・カワタロウ（川太郎）・カワランベ・カワコボシ（川小法師）・カワコゾウ（川小僧）・ガアラツパ・ヒヨウスエ・ガメ・カシヤンボ・スイジン（水神）・メドチ・ミズシ・コマヒキ・エンコウ（猿猴）・カワザルなど土地によって種々の異称で呼ばれていた。太郎・小僧・小法師・ワランベ・ワツパ（小児を意味する近世の俗語）などの語をその異称に含む土地の多いことは、この動物が童児の姿として広くうけとられていたことを示して

いる。ヒヨウスエはその鳴声により、ガメはカメ・スッポンと同じく水界を住家とする生態から、またコマヒキは即ち上述の習性から、そしてカワザル(川猿)・エンコウ(猿猴)はその容姿の印象からする命名であるが、それらに伍して、スイジン(水神)とかミズチ(水の精)を意味する。漢字では「虬」を当てる)の訛ったメンドチ・ミズシなどと呼ぶ土地のあることは、このもの正体が元来は水の精ないし水の主であることを問わず語りに告げるものである。夏祭を代表する祇園祭の旧暦六月は各地で川祭・河童祭の月であった。また河童が住むまぬにかかわらず、毎年春夏のある定まった日に牛馬を引いて川に入れあるいは川原に一日遊ばせることを以て一年中の牛馬の災を攘うための行事としていた農家が以前は多かった。牛馬の安泰を祈るためにはことさらに定めの日水辺に祭を営むことを必要とした古い信仰は、一方では右のような習俗となつて遺り、他方では各地に多い馬取淵・馬取池・葦毛淵・鞍掛淵、駒ヶ淵などの伝説にその残骸を印した。そしてまたこれは、水辺に牧を構えて籠種の馬を求め、霊馬を水神縁りの地に期待するという欧亜の大陸にも広

くみられる信仰・習俗とも袂を連ねるものである。かつて馬匹(ところによつては牛)を神供に望んだ水精ないし水神小童は次第にもとの威厳と靈能を失い、やがて身は猿猴の姿に墮し、掴まえて放さないはずの民馬によつてかえつて陸に引き上げられ、誓約・代償を人間に入れて漸く身命の全きを得るまでに零落の一途をたどつたのが水辺の信仰史の覆い難い一面であつた。幻の世界と現の世界との両棲類であつた河童は所詮動物学の対象とはなりえなかつたのである。

宇治川先陣の脇役

梶原景季・佐々木高綱の宇治川先陣争いは平家物語の中でも常に聞手の感興を最もそそつた章段の一つである。ころは寿永三年の正月、当時京都に在つて狼籍をほしつままにした同族木曾義仲討伐のため、源頼朝は範頼・義経の両弟に数万の軍勢を托して西上させたが、宇治川(勢多川)が決戦場となるであろうことは敵味方とも早くから予想された。搦手宇治に向う義経の軍に属した景季の乗馬はスルスミ、そして高綱のそれはイケズキ、どちらも主君頼朝秘蔵の愛馬であつて、今度の

出陣に当り特に兩人に貸与された何れ劣らぬ天下の名駿である。景季ははじめ望んだイケズキの代りにスルスミを賜わり、おかれて近江から鎌倉に参着した高綱はイケズキを貸与されて、衆の羨望と景季の嫉妬を招いた。それだけに高綱にとつて、決戦の場と目される宇治川先陣の功名は、名馬の名譽と鎌倉武士の意地にかけても絶対に他人に譲れないところであつた。「いけずき・するすみ」の章に詳しく語られるこの筋書は有名な佐々木・梶原の功名争いには欠かせぬ枕となつてゐる。平家物語が馬の名をそのまま章段の外題とするなどはもとより他に例がなく、それを以てしてもこの二匹がいかに理想の名馬とせられたか想像に難くない。平家物語は読みものではなく語りものである。高綱・景季の華やかな先陣争いととも、脇役である名馬二匹の名も琵琶法師などの口語りによつて広く国民の間に流布させられた。のちの太平記が建武三年正月足利勢の攻めた新田方の淀川の布陣を「如何ナルイケズキ・スルスミ二乗ル共ココヲ渡スベシトハ見エザリケリ」と形容しているように、いつしかそれは名馬の偶像として国民周知のものとなつていった。

源平盛衰記によればこの二匹はどちらも奥平泉の藤原秀衡の子元能冠者が頼朝に進上したもので、その産地は陸奥国三戸とも七戸ともいう。いずれにしても今の青森県八戸市附近である。そしてイケズキ・スルスミの名のいわれは

佐々木四郎の賜はられたりける御馬は、栗毛なる馬の極めて太う遅ましが、馬をも人をも傍を払って食いければ、生食とはつけられたり。八寸(前足の高さ四・八尺の意)の馬とぞ聞えし。梶原が賜はつたりける御馬も、極めて太う遅しきが、誠に黒かりければ磨墨とはつけられたり

というのが平家物語の解説である。東北地方は馬の産地として古くから聞え、また歴代の武士が名馬に憧れた物語はきわめて多い。その点からいえば、史上に名高い稀代の駿足が陸奥国を故郷とし、鎌倉武士の典型のような二人がその駿馬の名譽に先陣の功名を賭けたことは話の筋書としては少しも不思議ではない。

名のり以前の靈馬

源家の二勇士を乗せて宇治川を渡ったイケ

ズキ・スルスミはその誕地も死地も当然一つしかありえないはずである。ところが事実はそうでなく、その双方またはいずれか一方の生誕の地もしくは終焉の地と伝えるところが少なくない。それも独り東北地方だけではなく、遠く四国九州まで全国各地にわたっている、山島民謡集(柳田国男著)には多数の例が紹介されている。

羽前(山形)南村山郡西郷村大字石曹根ノ地、以前八大ナル沼ニシテ竜蛇之ニ住ス。池月ハ則チ之ヲ父トシテ生レシナリ。其後沼ノ水次第二乾キ、今ハ小サキ池トナリテ名ノミ昔ノ駒ケ池ト呼ブト云フ(山形県地) (下野(栃木)上都賀郡東大芦村大字引田、村ヲ流ルル大芦川ノ摺墨淵ノ片岸ニ釜穴ト称スル入口八九間ノ洞窟アリ。磨墨ハ此洞ヨリ飛出セリト云フコトニテ、岩ノ上ニ大サセ八寸深サ一尺ニ近キ蹄ノ痕アル外ニ、村ノ長国寺境内ニモ亦一個ノ馬蹄石アリテ其名ヲ駒留石ト称シタリ(駿屋雜誌二五))

などとはわずかにその一端であるが、イケズキとかスルスミとかいう名馬の名は、平家物語の話を全く知らない各地の田夫野人が偶然に思いつきうるものではない。つまりかれらに

はこの史上著名な駿馬を以って我が郷土の産とし我が村に終焉の跡を遺したと説かねばならぬ何かの理由があったのである。そして、つとも注意をひくのは、多くの村のイケズキやスルスミが、その誕生には必ずといってよい位に何かの靈異・奇瑞を伴っていること、またそれが池・淵・沼・川など特定の水辺か、あるいは岩石に遺されたその足跡というものに關係して説かれていることである。イケズキ・スルスミとは凡馬にはないある種の靈瑞によらなければ到底この世に出現しない靈馬の名であつて、またそこにこの名馬たる理由があつた。とすればその生誕地は決して陸奥の三戸・七戸に限るものではなかつたであらう。

諸国に多い駒ヶ岳・駒形石・馬石・駒繫松駒形神社など、特定の靈山・靈石・靈樹・靈社が駒・馬を名とするのは、神が馬に乗って地上に天降るとする古い信仰の痕跡である。神の召し給う乗料であるからには、それはどうしても非凡の靈駿でなければならぬ。特定の石を依代として神が人界に示現し給うとは由来久しい我が国の固有信仰であつたから、そこに印された蹄跡(こまがた)に、神の騎乗する神馬の幻が描かれることは極めて

自然のなりゆきであった。そして容易に水溜りとなるそうした神馬の足跡は硯石を連想させずにはおかない。硯といふ墨といふもとり中国渡来の文物であるが、種々の奇特をこれに附会する古来の伝えが多いのは、おそらく神馬の崇信に基づくことなしにはありえないであろう。「墨」の名をもつ駿馬はスルスキの外にも大将軍義経の「薄墨」があり、「強きことは獅子象の如く早きことは吹く風の如し」(源平盛)といわれた。磨墨といふ薄墨といい、誇高きこの名馬がともに「墨」をことさらその名としたのも基くところは同じであって、単に色が黒いというだけで直ちに「墨」が着想されるのは文雅を本分としないはずの武士には少くも自然ではない。

竜という幻の動物は水の精として大陸に生れしばしば神駿竜馬の父となった。そして我が国に輸入されてからは、牛馬を供物とするおそらくは日本産のミズチと各地の水辺で様々に混血して行った。羽前石曾根の池月や下野引田の磨墨にもその痕は明らかである。何れにしても神に緑りの特定の水辺は類稀な天賦の霊馬が出現するのに最も格好の場所であった。寿永の出陣に特記された名馬には前記薄

墨のほかにも同じく義経の青海波、介すけ広経の磯、和田義盛の白浪、北条時政の荒磯など水に緑りの名が目立つ(源平盛)。(衰記)イケスキは平家物語では生食・生数寄・生暖・池月など種々の字が当てられているが、稀代の悍性の故に「生食」と名付けたというのは無論こじつけであって、それはどうしても池より生れたもの、即ち水の神の子としての「池月」でなければならぬ。各地の水辺・蹄石に足跡を遺した多数の池月・磨墨は、もとその名とは無関係に郷土に示現した幾多の神駿霊馬の幻が、平家物語や源平盛衰記などによって知られた名馬の偶像にあやかっただけで一斉にその名を名のつた結果に外ならない。水に硯に緑りをもち、霊馬に極めてふさわしい名であったことがその命名を容易にした。平家物語の作者が理想の名馬にことさら池月とか磨墨とかの名を与えたのには由来久しい信仰を踏まえた霊馬の幻影が宿されている。人々が史上に名高いこの名馬をわが村里の産とせざにいらなかつたのは、いうまでもなく郷土に對する誇負と熱愛とのしからしめるところであるが、その以前から、奇瑞によって生まれ駿馬の蹄が各地の霊水・靈石にその幻を結

んでいなかつたならば、池月も磨墨もこれほど多くの土地で生れたり死んだりする奇蹟は到底あらわしえなかつたであろう。

(文学部教授・民俗学)

昭和四十年度

懸賞論文 受賞者発表

一等、該当者なし

二等、「近代日本と新島襄」

二部文学部三年 林 育雄

〃「新島襄における自然科学の理解」

工学部四年 岡田 清治

〃「青年新島の大志」

香里高校二年 北村陽次郎

選外 「日本の近代化と新島襄」

経済学部四年 山本 武泰

賞品、二等 一万円、選外 二千元

なお、表彰と賞品の授与は三月十二日

(土)午後二時より総長室にて行われた。

同志社新島研究会